

# 成果報告書

## 地域文化倶楽部(仮称)創設支援事業

団体名	一般社団法人シアター&アーツうえだ		
所在地	長野県上田市中央2-11-20	設立年	2016
運営主体	一般社団法人シアター&アーツうえだ		
事業目標	長野県東信地域の小学生から大学生が、自身の自発性に基づいて文化芸術活動に参加し、年代や障がいの有無によらず相互に創造性、社会性を育てていくことができる場を創設すること。地域住民が主体的に関わりながら、こどもたちが安心して活動できる居場所を街中に広げてゆくことや、質の高い文化芸術との継続的な関わりを通して、個々人に分断した地域社会のつなぎ直し、次世代の文化の担い手を育成することを目標とする。		
きっかけ	実施地域である上田市では教員の働き方改革で学校部活動の時間は減少、地域に代替の受け皿がないことから、放課後の居場所が不足していた。加えて養護学級、外国籍児童等、支援が必要となる子どもの放課後の文化活動の場は凡そ未整備のままである。また、部活動で大会に参加したり結果が優先されることにより芸術文化を通じて多様な価値観を経験し、自ら感性を育む機会が損なわれ学校を困む地域で多世代・他者に子どもの創造性や潜在能力が共有される機会が減っている。子どもが質の高い文化に触れ、創造・発表を地域における相互コミュニケーションの機会と捉えて、世代や障がいの有無によらない開かれた「関わり合い」の「場」=公共空間を整えていく必要があるという課題から発足した。		
団体・組織等の連携			
活動場所	犀の角、グランピア、上田映劇場、Editor's Museum、近隣商店街		
活動概要	月に2回、ファシリテーターやコーディネーター、ボランティアとともにその日用意された部活や自分が発足させたい部活など、自身の興味関心によってその日ごとに選択し、活動する。活動の種類は演劇、美術、音楽、ダンス、実験、地域探索、ボードゲーム、映画など。参加者の意思・希望で新しい部活を創設することも可能なことが特徴。毎回、活動の最後の時間で発表の時間を設け、それぞれの部活がどんなことをしたか、作ったものなどを他の参加者と共有した。子どもが自分自身の意思で活動を選択することにより、能動的、自発的な参加となり、発表の時間を設けた事により毎回の活動の目標が出来、モチベーションアップに繋がった。第一線で活躍するアーティストを招聘する「スペシャルデイ」を3回開催(うち2回分は別の助成金を利用)。質の高い技術や、アーティストの人柄を身近で体感する機会となった。		

## ○本事業による成果

令和3年度より継続して行ったことで活動自体が地域へ広がっていき、初年度から継続して参加したメンバーを中心に興味関心を更に深めることができた。商店街の七夕祭りなど、地域のイベントに当日参加するだけでなく、街頭に飾る七夕飾りの製作といった事前準備に子どもたちと一緒に参加させてもらい、地元住民との交流が生まれた。昨年度の活動に興味を持っていた近隣の商店主が子どもたちと一緒に地域の祭りを盛り上げたいという思いから、協働できないかと提案があった。実際に飾りの製作と一緒にいった商店街の住民はその後の活動もボランティアとして積極的に参加してくれた。同じく地域への広がりという面で、去年から続く「まちなか探検部」では周囲3kmほどに集中する中心商店街を徒歩で歩き、商店にインタビューに行く活動をしており、今年になって閉店してしまった老舗のカメラ屋や精肉店などにも行った。そこでは、大正時代から使われているという大判カメラを見せていただいたり、肉屋が周囲の学校給食の卸をしており、その日訪問した参加者が当日の給食で食べた肉が実はその店が卸しているものだとということが発覚したりと、地域の財産や地域に根ざして商いをする人材に出会う機会となった。この出会いは自分たちの生活が実は意外と近いところで地域の人々と繋がっていて、その中にはだんだんと消えていく商店や文化もあるのだということ意識するきっかけとなった。

子どもたちの自由な発想を元に活動を創作することで、うえだイロイロ倶楽部ならではのユニークな部が誕生した。例えば、「桑の実農業組合」や「劇であそ部」「まちなか探検部」「段ボール部」など、今年度活動した部は36種類となった。

添付の表を見る通り、参加しているメンバーは小学校の低学年中学年が多いため、まだ学校の部活・クラブ活動は行われていない。しかし、この活動をこの先も続けることを希望している参加者が多いため、成長した際、学校の部活動の代わりにこの活動に参加する事例も増えてゆくと思われる。

学校で行われている部活の直接の代替となる活動としてはほとんど行えていないため、周辺の学校から部活動の代わりとして参加している中高生はいない。代わりに、学校ではできないことが体験出来る活動として徐々に認知され、地域の注目を集めている。昨年度も同じ状況だったが、募集時期が遅いため、中高生は学校で部活動を決めた後に募集する形となってしまう、この活動には参加できていないと思われる。

高校教諭が数名ボランティアとして参加していた。参加者の子どもたちとの関わりから、通常の学校生活でも生徒たちとの関係性が変わるなど影響があったと意見があった。業務として、同じ年代の生徒たちとだけ接しているとお互いに関わり方が固定化されてしまうが、違う年代の子どもたちや大学生、ファシリテーターであるアーティストに触れることで教諭自身が広い視野を得ることができ、学校生活も別の視点から物事を考えられるようになったとのことだった。

保護者からは昨年同様、「一方的な指導ではなく、子どもが自分でやりたいことを大人が楽しんでサポートする体制がよかった」「クラブに通う前より子どもが積極的になったし、いろいろな大人と関わることにハードルが下がった」「学校で得られる価値観以外にも大切なことがあると気づかせてくれる場所」など、活動の趣旨に賛同する声をたくさんいただいた。子どもたちへのアンケートでは「いろいろな活動ができて楽しかった」「安心して過ごせる・自分を解放できる・自分を広げることができる場所」「自分の好きなこと・やりたいことを思う存分できて、その楽しさを他の人と共有できる」といった自主性を重んじ、他者との関わりを重視した活動を子どもたち自身も楽しんでいる様子が伝わってきた。

## ○児童・生徒への指導に関する工夫

民間の「劇場」が運営する活動として、学校や他の地域の文化活動とは一線を画したクラブとなるよう工夫を重ねた。成果を追求するために課題をこなすことや用意されたプログラムを行うだけの活動を行う事など、所謂イメージの部活動の実施形式や概念に囚われることなく、子どもたち自身から生まれる「やりたい」という気持ちを尊重している。そこに学校や家庭では出会えない劇場に集う大人たちがファシリテーターやボランティアとなって伴走しながら、指導者ではなく「同志」として活動に取り組むよう意識した。

毎回、解散する前にはその日何をして過ごしたか、次に何をやってみたいかアンケートを取った。その活動日にやりきれなかったことや、新しい興味関心をそこで確認し、次の活動で実現できるよう準備をした。

障がいや特性をもった参加者に対してはボランティアが1対1で対応する形をとって目を配り、活動のフォローをした。バイリンガル環境で育つ子も参加しており、年齢・性別・国籍・障がいに関係なく、それぞれの興味関心に従って、それぞれのペースで、しかし「助け合い」ながら活動を深められるよう導いた。

昨年に続き、活動の始めに「お知り合いの時間」として全員でコミュニケーションワークを通じて、他人を知る時間を、終わりの時間に「おふるまいの時間」として、その日の活動で何を楽しんだか全体に発表する時間を設けた。個々の活動で深めるだけでなく、全員揃って活動する二つの時間を通じて、様々な価値観や文化芸術があること、他人を尊重する大切さ、他者との関わりを学べるようにした。

活動終了後はファシリテーターやボランティア、コーディネーターで振り返り会を行い、その日の子どもたちの様子や問題点・課題点の共有をした。

ファシリテーターやボランティアは劇場に関わるアーティストや演劇関係者など日本各地から訪れることもあり、ボランティアとして来ている地元の大学生や近隣商店街の住民など地域に根ざした人材の交流の場ともなった。参加者の子どもたちだけが活動を楽しむだけでなく、サポートするための大人同士も文化的な時間を享受する機会となっている。また、振り返りの時間を通して、関係している人たちに負荷がかかっていないか、何を課題として抱えているかなどヒアリングする時間として活用している。

## ○運営上の工夫

申請段階では小学生と中高生の活動を分ける計画だったが、中高生の応募が少なかったことや集まったメンバーの希望から一緒に活動することになった。代わりに体験入部という形で会費を取らずに毎回、新しいメンバーを受け入れた。1年間続けることに不安を感じている子どもや、時間が合わずなかなか送り迎えが叶わない保護者を持つ子どもたちが参加した。この活動を昨年度より多くの子どもたちが体験出来、運営側としても会員制のみで活動した昨年度に比べ、さらにたくさんの参加者と出会うことが出来た。

中高生だけの活動が前期で出来なかったため、後期までの休止期間に実験的に行なった。演劇とダンスを組み合わせた舞台作品を作りたいという参加者の希望から、小学生も含め5名程度で集まって何度か練習を重ねた。予定外の活動であったため、ボランティアやファシリテーターの募集・確保ができなかったり、活動場所の確保が急遽必要になったりした。ボランティア・ファシリテーターの代わりにコーディネーターのみが活動に参加することになり、負担が増えてしまった。衣裳や小道具の作成も行ったが、子どもたちがその日自由に興味のある部活に参加することができる、というこのクラブの性質上、参加者が継続的に同じメンバーが必ず参加することが難しく発表までには至らなかった。しかし、台本や演出を自らで考え、集まった「役者」や「スタッフ」と作品を作り、相談を重ねて衣裳や小道具を作成するという時間は参加者にとって、他者との濃密な関わりを学ぶ貴重な機会となった。

保護者との連絡はメールのみに限り、SNSを活用していない親との差が生まれないようにした。活動時の様子をウェブ上のクラウドサービスで共有するなど、インターネット環境があれば誰でも共有できるよう工夫した。最終回の3月1日はオープンデーとして、保護者も参加できる回にし、普段伝えきれていない子どもたちの活動での様子や、実際行われている倶楽部を体験できるようにした。関わる大人たちがどんな姿勢で子どもと向き合っているか、参加者がどんなことにどんな形で取り組んでいるか直接見てもらう機会となった。

## ○継続的な運営に関する課題・展望

今年度、地域との繋がりをより強く持たため、来年度の活動ではボランティア参加としての人的リソースだけではなく、予算確保の面においても尽力いただけるよう、協力を要請していく。既に、寄付を申し出ている企業があるため、近隣商店街との連携を強め、現在の運営団体のみの活動としてではなく、街としてこの活動を続け、支えていけるようにしていきたい。

現在活動場所は劇場の建物内で行っているが、子どもたちの要望から屋外での活動が増えてきている。特に走り回ったり、声を上げたり活発な活動となることが多い。長野県では「子どもの声がうるさい」という地域の苦情から公園が閉鎖されたことが話題となっているが、実際、街中で子どもが遊べる場所が極端に少ないのが現状である。我々の活動でも放課後の居場所として学校の校庭や近隣の空きスペースを使用する提案をするなど、安心して出掛けられる拠点を作っていく必要がある。

今年度、小学生の部と中高生の部を分けるつもりで計画を立てていたが、結果的に中高生の人数があまり多くなかったことや応募者の希望から活動を分けず、全体で活動をした。小学校の高学年、中高生からは直接意見が出たわけではないが、低学年に合わせた活動に物足りなさを感じていたように思う。「体験入部」として実際の活動を体験できるようにしたが、高学年や中高生はなかなか定着しなかった。ただ、高校生で3名ほど、後期の活動からはほぼ参加していたメンバーもいたので、一概に年代で活動を分けたほうが良いということではないようだ。来年度以降も希望に合わせて、活動の形を変えていきたい。

## ○令和5年度からの学校部活動の段階的な地域移行に関する方針・提案

周辺の学校の教員や関係者に活動の見学をしてもらう計画をしていたが、連携が取れず今年度は叶わなかった。教育委員会の学校教育課の課長や市議会議員と面談を行い、部活動の地域移行やこの活動の継続のための議論を行なった。来年度以降は教育委員会との連携で周辺の学校と会議や意見交換を行える関係性を作っていく計画である。

不登校の児童・生徒が一般の教室の代わりに通う、中間教室に「出張イロイロ倶楽部」をする提案が出ている。まだ具体的には決まっていないが、現実的になっていけば部活動の代わりとして放課後の時間に活動するなど地域が担う活動として、学校内で活動できる可能性がある。

学校部活動の地域移行を考える時に、既存の部活動をベースに考えるだけでなく、学校には存在しない部活を地域の特性や人材に合わせて新規に立ち上げていくことも我々のような民間文化施設とスタッフ、ボランティアなどリソースが揃えば可能ということが証明された。多種多様な趣味や嗜好が存在する現代社会において、前例にとらわれず、部活動自体も多様性を担保していくことが求められているのではないだろうか。

○令和4年度 取組状況等

参加者	人数等	32名 小学生27名 中学生4名 高校生1名 (体験参加など含むと合計52名)
	学校名	上田南小学校、上田東小学校、塩尻小学校、神川小学校、清明小学校、上田北小学校、傍陽小学校、丸子北小学校、豊殿小学校、神科小学校、塩谷西小学校、川辺小学校、川西小学校、中塩田小学校、青木中学校、第五中学校、第一中学校、丸子北中学校、長野第一学院中学校
	募集方法	運営団体と関係NPOなどが協働し募集チラシを作成 4月末から市内全小学校・中学校・近隣高校に配布、 加えてSNSや新聞、街頭の掲示板などで告知
指導者	人数等	運営団体職員(コーディネーター):2名 ファシリテーター:2名 ボランティア:10名程度
	募集方法	運営団体が事業などで関わってきた人材に依頼、公募はしていない
参加者の移動手段		電車、徒歩、保護者による送迎
活動費用	指導者謝金等	1,050円/1時間
	その他	事務局賃金 1,050円/1時間 保険料 約1,000円/1回 材料費 約10,000円/1回 会場借り上げ費 約9,000円 /1回 ボランティア交通費 1km/20円、上限20km、1回10人程度参加 募集チラシ印刷費200,000円(デザイン費込み) スマートフォン使用料約2,000円/月など
活動財源	会費	入会金2,000円、月謝1,500円 年間約450,000円
	その他	助成金約240万円
スケジュール	基本活動	月2回、17時～19時
	年間	4月募集チラシ配布 5月募集開始、締め切り、初回オリエンテーション 6月～8月前期通常活動 12月～3月後期通常活動 3月オープンデー開催
保険加入等		レクリエーション保険、 参加者・コーディネーター合計50名 1回約1,000円 ボランティア保険、250円/年間

## 【活動の様子（写真添付）】

▲お知り合いの時間



▲段ボール部



▲イロイロJA農業組合（桑の実収穫）



▲プラ板部&らくがき部



▲料理部（収穫した桑の実をジャムにした）



▲高学年の参加者がファシリテートするボードゲーム部

